

## 神田 茂先生を悼む

### 弔 詞

日本天文学会理事長

齋藤 国治

いつまでもお元気で、そして私どもの心の支えとしてお慕い申上げていた神田先生が、去る7月29日急にそして静かになくなりました。まことに断腸の思いに耐えません。

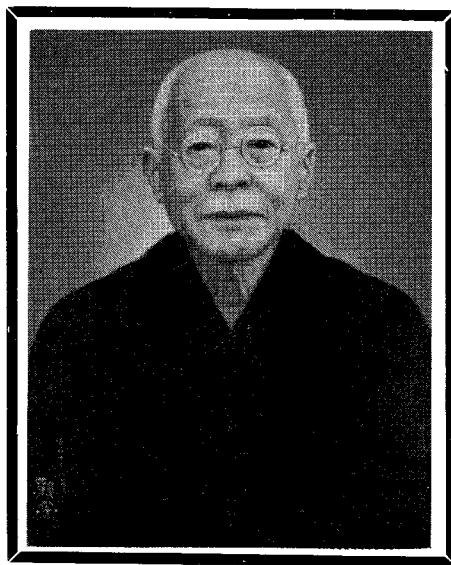
先生は明治27年に麻布新堀町13番地に、神田選吉氏の長男として生まれました。生れながらにして、自然界のするどい観察家でありました。年令5歳のころ、つぎのような逸話があります。父選吉氏が幼いわが児に向って、「梅の花ピラは何枚あるか」と訊ねたそうです。茂少年は「ちょっと待って」といって庭に下りていき、暫くして帰ってきて言うには、「梅の花ピラは5枚のものが一番多いけれども、中には4枚のものも6枚のものもあつた」と答えたそうです。

明治43年には、有名なハレー彗星があらわれました。茂少年はこのとき16歳でしたが、毎晩ハレー彗星の観測をして、「彗星私観」という専門的記録を残しました。

いま改めて天文月報の古い巻を繰ってみますと、大正7年8月のペルセウス座流星群を、弟さんの神田清氏と一緒に観測をして、その成果を発表しています。これは先生が東大理学部学生のときのことです。

大正10年の天文月報には、新理学士の称号をつけてわが天文学界にデビューせられ、その年の天文月報には一年間に6篇の論説がのっています。先生はまた日本各地の天文同好者に彗星の観測を奨励せられ、そのデータをまとめて逐次天文月報を飾りました。当時解説記事ばかり多かった月報誌上でこれはオリジナルな貴い資料でありました。その間、日本天文学会の編集理事として、評議員として活躍していただきました。

ところが、昭和18年5月当時の天文台長の統制方針と意見合わず、48歳の働き盛りのとき東京天文台を退官せ



神田先生の80才を記念して諏訪の青木正博氏が、諏訪在住の松浦観孝画伯に依頼し、湯河原の御自宅における姿を画いたもので、生前をしのんで葬儀の際、祭壇に祭られたものの複写である。(青木正博氏提供)

られ、研究の第一線を退かれたことは誠に残念な事件でありました。しかし先生はこれにくじけず、戦後逸はやく日本天文研究会をおこされ、小惑星・変光星・彗星・流星・隕石・黄道光などの観測と調査、また曆学・日本天文学史のひろい領分にわたって、在野の研究者の研究の一大センターを築きました。

先生はおなくなりになる数日前にも、ハレー彗星の周期についての新しい解析をなされ、回報を会員各位に流しておられます。まことに先生は80才のいま瞑目をさる直前まで研究の鬼に徹した一生を全うされました。この度勲四等瑞宝章を下賜されたと聞きます。

あれを思いこれの思うとき、哀悼追慕の念のいやまざるものがあります。ここに日本天文学会を代表し、先生のご冥福をお祈りします。

合掌

昭和49年8月10日

## 東京天文台と神田先生

古 畑 正 秋

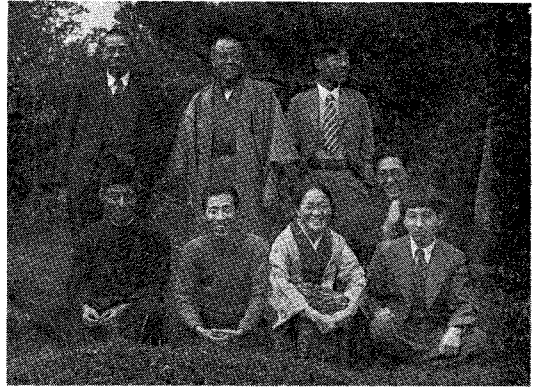
大正9年7月に当時の東京帝国大学天文学科を卒業された先生は、すぐ大学の助手に任命され、翌大正10年に東京天文台が理学部附属から大学付置となって官制が布かれたときに天文台技手を兼任されるようになった。当時の天文台はまだ麻布にあって、三鷹の庁舎に移りはじめたところで、先生ははじめ麻布で編暦や太陽観測などいろいろな仕事に携わっておられたようである。大正12年の大地震のときには新しい三鷹の官舎に移られていたようであるから、そのころから三鷹で勤務されたようである。

このころ日本の暦書としては神宮暦が天文台で編さんされていたが、本格的な天体暦を編さんしようという計画がたてられた。しかし、この方は海軍水路部が当ることになり、東京天文台では小規模な天体暦を含む理科年表を発行することとなった。そして先生がそれを担当することとなり、そのために増員された技師に任せられた。大正12年7月のことである。こうして先生は、後に天文台を去る昭和18年まで、実に20年に亘って理科年表を育ててこられたのである。すなわち公式には理科年表一すじに天文台生活を送られたわけである。

理科年表第1号は大正14年(1925)用のものが、大正13年に刊行されている。これが現在まで続いて日本の学野で重宝がられていることはご承知の通りである。

私が学生のころ先生のお宅へ伺ったのは昭和5年と記憶しているが、毎日理科年表の原稿ととりくまれ、校正などを実に楽しそうにやっておられた。先生はこうした綿密な仕事がお好きであったようで、理科年表はまさにその人を得たという感じがある。平凡な仕事の連続であって、よくもまああきずにと私などは思ったものである。理科年表の原稿や天文月報の校正などをぎっしりつめた、すり切れたカバンを重そうにかかえて、下駄ばきで官舎を出かけられる。戦争中に焼けた木造本館でスリッパにはき替えられて仕事。夕方はまた重いカバンをかかえて帰って来られる。というのは、退任後もこうした仕事が好きで離せられないという先生の性格の故であったようである。こうした日常が20年もの間くり返された。私はいまでもあのころの先生のお姿を思い浮べる。

先生が天文台でされていた研究はかなり多彩であった。彗星や小惑星などの軌道計算もかなりお好きなようで、当時の手回しの計算機を愛用して、幅広い計算をされていた。先生の最初の著作「彗星」が出版されたのは大正13年である。また古暦や天文の古記録にも興味をも



1937年(昭和12年)11月東京天文台の神田先生官舎にて

後列左より 下保 神田 吉田正太郎  
中列 河西慶彦  
前列左より 黒岩 古畑 神田夫人 広瀬

たれ、官舎の机の上にはうす高くそんな書類が積まれ、わずか紙一枚くらいしか残っていない空地で物を書いておられた。東照宮300年祭記念会の研究費を得られて、日本の古書の天文記録をくまなく調べ日本学術振興会の出版費で出版せられた「日本天文史料」および「日本天文史料総覧」の大著が出されたのが昭和10年前後である。私が学生のころ、広瀬秀雄、大崎正次の二氏が数年間その編さんを手伝っておられた。

このような古暦、古記録の分析調査などは、これも先生の凝り性のあらわれたもので、理科年表や観測記録の整理などとともに、いわば飯より好きな仕事だったようである。黙もくと着着いて仕事をされるので、先生のなされたものには誤算、誤記のようなものが非常に少なく、またいろいろなことに対する記憶も実に確実であった。先生の性格のしからしめたものであろう。

先生が天文に興味をもたれたのは中学生のころのことと、旧制高等学校の時代には天文観測もされている。変光星の眼視観測を始められたのは一戸直蔵博士の感化によるものであったとのことであるが、大正9年というから、大学を卒業される前後のころのようである。天文台に入られてからは、本務の傍ら自分でも観測されるほか、アマチュアの仕事として広くすすめられ、日本のアマチュア活動の育成に力を入れてこられた。変光星ばかりでなく、太陽黒点観測、流星観測などにも同じように熱意をもって多くのアマチュア観測家を育てている。当時の天文月報にはそれらの観測結果を掲載すること

も、その趣旨で先生がはじめられたものであった。

天文台を退職されるまで、このアマチュア天文観測の育成は準本務のように続けられ、天文台官舎の神田家はそうした観測家のメッカようになって、いつも賑わっていた。職業人から大学生、中学生に至るまで誰かれの区別なく訪れるアマチュアをあの温顔で迎えていた。言葉少なにいろいろの指導をされるのであるが、先生もそれが嬉しい様子が言外にくみとれるので、アマチュアの方も遠慮なくごやかになって、遅くなると夕飯までごちそうになって帰るといふ常連がつきつぎと絶えなかった。天文台を退職されて後は、この舞台は湯河原に移り、日本天文研究会となって続けられたのである。

先生が天文月報の編集をされていた期間はかなり長かった。その間前記のようにアマチュアの観測を発表する

欄を設けたことをはじめ、昭和5年には天文学会要報の発刊を行い、天文台出版物には載せられない在野の観測家の論文を収める場もつくられた。要報は先生が苦心して育てられたものであるが、先生が天文台を退職されてから、戦後の困難さもあって、ついに姿を消してしまったのは惜しまれる。

こよなく愛された理科年表の仕事は昭和18年に関口台長によって機構改革を機に強制的にとり上げられた。日ごろ温和な先生も本来の根性を出されて強く反対したため、ついにその職を去るの余儀なきに至った。現在では考えられないような時代の波であった。しかし、野に下って好きな道が続けられた先生の余生は、かえって幸福だったのではないかと、今になって私は考えている。

(8月17日)

## 神田 茂 先生 の 思 い 出

村 山 定 男

「天文総報」という一寸奇妙な名の出版物は、私たちにあって大変なつかしいものである。これは神田茂先生が創立された「神田天文学会」すなわち今日の日本天文研究会の機関誌の名で、はじめは先生御自身が書かれて陽画感光紙に焼いて配布され、ひと頃は私たちがお手伝いしてガリ版ずりを出したこともあったが、最後にはタイプ印刷となり1963年12月号まで18年ほど続いた。(以後は観測月報として今日まで続刊)今も私の手もとには昭和20年6月18日付の第1号が残っており、消えかかった陽画感光紙上には先生自筆の発会の趣旨がまだどうやら判読できる。

私が神田先生とおつきあひするようになったきっかけはこの天文総報第1号であった。昭和20年6月といえば、太平洋戦争は既に敗色濃く、わが本土の主要都市は連日連夜B29重爆撃機の空襲下に廃墟と化しつつあった。そのころ私は化学教室の勤労働員で兵庫県有馬におり、温泉水中から希アルカリ元素を採取する仕事をお手伝いしていた。有馬から宝塚を経て、少しばかり行った雲雀ヶ丘に私が惑星観測の教えを受けた故伊達英太郎氏が住んでおられ、私はしばしば有馬、宝塚間の山道を歩いてはお訪ねしていた。その伊達さんがある日示されたのがこの天文総報第1号で、今度神田先生が新しく会をつくられたので君も入会して変光星の観測などもやってみてはどうかとのお誘いをうけたのだった。

神田先生のお名前はその前から天文月報や科学雑誌などでよく存じ上げていたが、直接お便りしたのはこの時

がはじめてであった。お顔を見るようになったのはその秋帰京してからで、昭和21年正月の例会の席上でであったかと思う。こんなわけで神田先生の御指導をうけた者としては私は決して古い方ではなく、戦前からお世話になっておられた先輩も数多いのであるが、たまたま昭和21年秋私は東京科学博物館(現在の国立科学博物館)に奉職するようになったので、それから今日まで足かけ30年間、神田先生と頻繁にお目にかかっているいろいろお教え頂くことになったのである。毎月1回開かれる例会は今日までほんの数回をのぞいて科学博物館で開かれているので、会場のお世話は自然に私と小山ひさ子女士の月読になったし、会の進行係もいつの間にか私の役目になってしまった。神田先生が最後にお元氣な姿を見せられた



彗星発見者藤川繁久氏と語る神田先生  
(1970年5月)

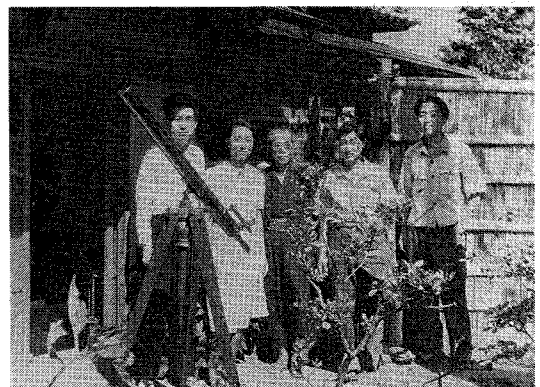


1973年1月15日  
東京天文台富田弘一郎氏官舎（元神田先生宅）にて

のは去る7月7日第345回目の例会であったから例会だけでも300回ほどはお目にかかっているわけである。前述の伊達さんにおすすめていただいた変光星観測はあまり永續しなかったが太陽観測のお世話はかなり長いことお引き受けしていた。私個人もさることながら科学博物館として神田先生に最もお世話になったのは隕石標本に関することがらであった。御承知のように国立科学博物館には日本の隕石標本の大半が保存されているが、終戦時に軍隊に荒らされたり、一部を疎開したりして混乱し、私が着任した時にこれが隕石標本だよと見せられた時には木箱に放りこまれてラベルが失なわれたり取りちがっていたり、かなりひどい有様であった。幸い一つも失なわれなかったのは戦争中にいた先輩のおかげだと思うが、さて、これを一つ一つ同定し身元を正す仕事はなかなか大変であった。博物館の台帳や記録の類も失なわれたり行方不明のものも多かったからである。この仕事に際して最大の指針となったのは神田先生が戦前から博物館に通われて写しとおかれたメモ類や古い文献であった。先生は昭和の初期から日本の隕石に興味を持たれ、落下記録をさがし集めたり標本の所在を調べたりして日本の隕石表なども何度か発表しておられたのである。先生の集められた資料や御助言のおかげでこれら標本の同定が終ったあとも、私は先生と共に日本の隕石調査の仕事を今日まで続けてきた。先生は近年私がさまざまな雑務に首をつっ込んでいるのを見られていて、“貴方は是非隕石の研究に専念してもらいたいと思っています”。とたしなめられたこともあった。先生のお仕事は御存知のように大変広範囲にわたっており、私がお相手

をした隕石の調査だけでもかなり骨のおれる仕事であったのだから、他のいろいろな方面のことを考えると、神田先生の向学心が如何に旺盛であったか全く驚かすにはいられない。彗星、小惑星、流星、変光星、天文学史、暦、和算……と先生が研究調査された資料の膨大さ、そしてそれらをこまごまと書かれ印刷された紙数といい、今後も先生の遺稿類が整理されるにつれて改めて驚嘆させられるにちがいないと思っている。

さて、先生はこうしていろいろな研究に調査に没頭されるかわら、われわれアマチュアの面倒をみるという誠に労多のお仕事を飽くことなく続けられたのである。戦前から先生のお世話になられた先輩方、戦後早くからお宅に出入した私たち、その数は比較的限られたものであったけれども、先生は実に懇切に世話をやかれ、また地方の数多い会員にはおびたしい数の手紙や自作の感光紙や印刷物によって指導をつづけられた。元来先生は無口な方であったが、われわれがお訪ねするのを楽しみにしておられたようで、もう失礼しようと立ちかけると、次から次にいろいろな資料を“これはどうですか？”と持ち出されるので、ついに辞去する機を失して泊めていただくというようなことも再々あった。戦争直後の湯河原は現在のようにビルが建ったりしてなくて空気もすがすがしく夜空も実に美しかった。先生が当時愛用しておられた英国レイ社製の3インチ屈折望遠鏡（これは故宮島善一郎氏から先生が譲られたもの）を門前に持ち出されて、親しく変光星の目測などを御指導いただいたのも記憶に鮮やかである。時には先生のお宅を基地に会員有志でハイキングに出かけたりしたこともあった。昭和21年の文化の日であったか、皆で十国峠の日金山に登った。先生はわれわれ若い者よりもはるかに健脚で一番先に立って登られた。そのころお伴した中には今日東京台で活躍しておられる富田弘一郎氏、それに森本雅樹氏の可愛らしい中学生姿も見られた。お宅に参上する度に奥



神田先生宅玄関前にて（昭和21年）  
左より 村山定男、小山ひさ子、神田先生、  
星野実、富田弘一郎の各氏

様にも大変御厄介になった。無口な先生と対照的に奥様は朗らかによくしゃべられ、実に世話好きな方であった。残念なことに先生に先立って他界されたが古い門弟方には忘れることのできない奥様であった。

あれもこれも思い出せば30年も昔のことである。そのころの先生のお齡が丁度現在の自分の年齢になることを考えると感慨にたえない。先生が所信を貫かれて東京天文台を退官されたのは満49才の時であったと思う。さぞかし御心労もあったのであらうと思われるが、それからの30年を先生は湯河原の静かなお宅で研究三昧に送られたのである。思いようによっては誠に恵まれた後半生を過ごされたとも思えるのである。そして、その30年は私共アマチュア仲間の指導一すじに打ち込まれたのであったと思えば誠に得難い有難いことであった。

今日まで断えずその翼の下に私共をかばって下さった先生を失った今、ヒナが親鳥を失ったような心細さを書くことができない。度々私事にわたって恐縮だが、私

は丁度10年前の同じ頃、実父を失い、さて、これから一人でやってゆけるだろうかと心もとなく思ったものだが、今神田先生を失って同じ不安をいただくのは私だけではないだろう。

しかし、先生が“神田天文学会”をはじめられたころ、ほんのひとにぎりにすぎなかった天文愛好者の数は今日ではおびただしいものになり、立派な観測設備を持ち、海外に遠征し、あるいはいろいろな本も書くといったたくましい人たちが育っている。日本のアマチュア天文界がこれからどのように変わってゆくのか私にも予想しにくい。神田先生がまかれた種の数々はどのような形にもせよいろいろな所で成長し、花開くであろうことはまちがいない。

今、先生とお別れするに当って、改めて心から“先生御苦勞様でした、有難うございました”と申し上げたい気持ちで一杯である。  
(8月20日)

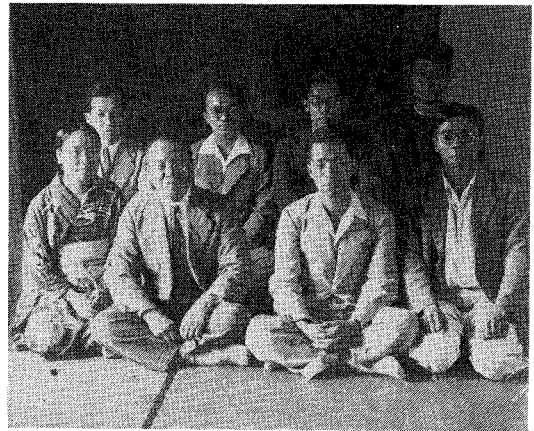
## 神田 茂 先生 を 憶 う

### 五 味 一 明

もう50年も以前のことで、日時はあまり正確ではないが関東大地震の夜は上諏訪駅前広場で、河西慶彦さんと夜を過しながら、流星の観測をして翌日あの大形の流星観測用紙に、天文月報の表紙の星図を写して記入し、河西さんから観測を神田先生の所に送って戴いたのが先生から御指導を受けるようになった第一歩でした。

流星の観測をやりながら星座をおぼえたので変光星の観測を始めたが、私は同級生の溟喜代治君より出来が悪くて、河西さんからあの天文月報の変光星観測欄に送って戴くことができなかった。そのうち河西さんの御許しがでて天文月報の観測欄に発表して戴いた。このうれしさは大変なもので、五味一明はGmという記号であり、このGmは今だに使用されるようになった。先生は実に親切なお手紙を下さり、その中に一生懸命に永い間続けて観測をするように書かれてあったことは今でも忘れられない。私を先生の官舎につれて行って下さったのは神田清先生で、その御案内で春の天文学会の時お茶の水の駅で一緒になって夕方やや暗くなる頃官舎に着いた。林に囲まれた静かなところで、物音一つしないんだか変な様な気がするほど静かで、天文学者の人の家はこんなに静かなところでなければならぬのかという感じで家の中へはいった。奥さんは小柄の人で、その頃はハイカラなフチ無し目鏡をかけておられた。翌朝・清先生

が白髪でザン切髪美しいおばあさんをつれてこられて、これが母ですと私に紹介して下さいました。私はその頃RU Casという変光星の観測をしていたので、この星の発見と観測をした人たちとか色々を知りたかったので、先生に種々の文献を見せて頂いた。これをノートさせてもらって天文月報第15巻第3号の「肉眼的変光星」の別刷を頂戴して帰ったのが神田先生御一族とのつ



1938年（昭和13年）8月1日

東京天文台の神田先生官舎にて

後列左より 広瀬 五味 大崎 黒岩  
前列左より 神田夫人 神田 古畑 下保

ながりの初めでありました。そのころ10年たてば北海道で日蝕があるから見に行きたいものだと河西さん、古畑、小椋さん達と話をしていたりした。古畑さんが東大の天文科に入学されてからは、なんとかして日蝕に行きたい希望が強くなり遂に古畑、黒岩、五味の三人で北海道に日蝕見物に行く相談がまとまった。古畑、黒岩さんとで望遠鏡その他の観測道具を揃えて、私は時計と野宿の道具を一式そろえる話で用意を進めた。古畑さんからは、神田先生の官舎を使ってこっそり用意をしていると手紙に書いてあった。どうせ観測に行くのだから、見物に行くのだから判らないので当時流行の無銭旅行で行こうと思っているのだから、お金が無くて神田先生に御迷惑をかけているのではないかと思っていた。6月10日頃に神田先生のお宅に集まって見ると、奥さんの口から「学生は休んでまでも日蝕見物には行かない方がいい」と偉い人にいわれたとか話されたが、何か問題があったようにお話しがあった。神田先生に御迷惑をかけていることもちょっと判った様な気がした。「三人共貧乏だから野宿して熊に食べられないように、お金がなくなったら電報を打ちなさい」と奥さんにいわれて出発した。

私達は日蝕前夜にトカゲ座に新星を発見し、その夜は電報、写真、観測と一睡もせず日蝕をむかえた。快晴にめぐまれて美しいコロナ、紅炎の観測に成功して村人と万才をしている所へ神田先生からニルゼン、ロレッタが3等星の新星をトカゲ座に発見したと転電されて来た。先生の心にくいまでの心くばりに三人共頭の下る思いであった。その後新星メダルの受与式だと書類の事で先生の所へは度々参上しなければならなくなり、その度に親分格の広瀬さん、下保、大崎、変光星図や流星用星図を



1967年（昭和42年）5月14日  
第1回日本アマチュア天文研究発表会における  
乾杯の音頭を取る神田先生（川崎産業文化会館）

書いていた古畑、黒岩さん達が集まり、それはにぎやかな談話室となり、いつも奥さんが中心となってオダを上げた。殊に広瀬さんと黒岩さんの関西弁と関東弁の比較は万才のように聞いていた。先生はどんなに大笑をして騒いでいる時でもニコニコしていて、すうーと立上ってスタインハイル（10cm 望遠鏡）へ観測に行かれ、家には私達が散会するまで帰って来ないこともしばしばであった。先生は50年以上も民間の天文屋さんを親切に、しかも道を誤らせず御指導下さった。先生を始め御一家の人達の事は、私はじめ神田家に集まった大勢の人達の青春の思い出となると共に、生涯心にのこることでしょう。もう先生に接することはできなくなりました、私は長い間先生から受けた教訓と御指導を胸に秘めて、生涯の旅をつづける事でしょう。最後に先生の御冥福を祈りつつ……。（昭和49年8月15日）

## 大人みまかりぬ

川崎 みのわ・としゆき

蝸大火 西に流れる夜の更けに  
星の大人<sup>ぬし</sup>いまみまかり給ふ。

彗星よ 御魂をのせて回帰せよ  
呼べど虚し空のしづかさ。

人逝きて 星になりたる伝説を  
思へば 蝸星座輝く。

# 観測者 神田 先生

森 本 雅 樹

日本天文研究会の講演をききに、海軍兵学校から復員された大石さんや佐久間さんに連れられて上野の科学博物館に行ったのが神田先生にお会いした最初だったとおもう。1946年、私は中学一年か二年だった。そのうち例会にも出入りするようになり、いつの間にか「会員」ということにもしていただいて、見様見真似で変光星の観測をしたり（データの方はみとめていただけなかったようにおぼえているが）、自分でも望遠鏡が作りたくて近所のブリキ屋に入り浸っては鏡筒のハンダ付けをしたりしてどうやら木星の衛星がチラリとみえて感激したりといったおきまりのコースをたどった。

しかし、先輩の大石さん佐久間さんですらみんなの中では若い方であったのに、イタヅラをしては小山（ひさ子）さんにおっかけられて机の下を逃げてまわったりしたのが祟って「日本天文研究会はジュニアを分離すべきだ」というようなことを云われてしまったりした。

これは神田先生が黙って聞いておられて、例によっていつまでも結論をお出しにならないためなんとかうやむやになっているのちびろいした私であった。

とにかく一つ一つがおどろきだった。ちょうど礼文島日食、「日本の位置がわからなくて日食の予報がまちまちになる」。太陽がどうして光っているか、私たちの耳に入って来たのも日本天文研究会の例会を通してだったと思う。

先生は観測を非常に重んじられる方であった。今なら「天文クラブ」とでもよばれるだろうが都立六中（現都立新宿高）の天文部も、「チガウ。天体観測班だ」と上級生から言われた。神田先生の影響である。

そんな雰囲気となんとなく異質のものを求める心もあり（そのころはもう机の下にもぐれないくらい大きくなっていたが）また、ラジオいじりという新しい魅力に目がくらんできたりで、神田先生の例会もいつとはなしに足遠くなくなってしまった。

それから30年もたってもう一度自分を眺め直してみると、これはどうしたことだろう。ブリキ屋さんのかわりにナニナニ鉄工、ナニナニ電機に入り浸っては新しい望遠鏡作りに憂き身をやつし、観測々々と称えている自分ではないか。そんな自分と感じたからか又はなにかの偶然か、最近また神田先生とお会いするチャンスがふえて来ていた。先生も昔とかわらずにここにことあいさつを受けて下さった。

そんな中で昨年、富田弘一郎さんが50年昔の神田官舎

KANAMORI, H.  
094.486  
KANDA, S.  
004.071  
123.063 .064 .066 .067  
KANDA, T.  
032.031  
034.024  
KANDASWAMY, J.  
141.068  
KANDEL, R. S.  
115.001  
KANE, J.  
097.093  
KANE, S. R.  
076.019  
KANE, W. T.  
094.659  
KANEKO, N.  
158.110

Astronomy and Astrophysics Abstract  
1973年版より

に移られたのを機に、神田先生に東京天文台に来ていただき、関係のみなさんにお集まりいただいてにぎやかに会食していただいた。富田先輩の蔭にかくれてだが、やっと一つ、先生孝行ができた。

サア、観測々々。

(9月1日)

追記：天文月報編集部で先生の著作リストを作るのに私は *Astronomische Jahresbericht* (天文年次総目録) のサーベイを受け持った。

先生の名前は1920年の白鳥座新星の独立発見にはじまって、途中に少しのやすみはあっても1973年まで出ている。

内容は彗星、変光星、流星、小惑星等の観測、彗星、小惑星の要素決定や同定などが主で「観測者」としての先生の姿をみせてくれる。

はじめての1920年のときは著者索引では G. Kanda とミスプリになっているが、翌年からはこの毎年何回も出て来る観測者の名前はまちがわれたりはしない。そして、じきに K. Kanda (弟君神田清氏) の名前が並んで出るようになる。清氏ははやくで亡くなられるが、最近になると T. Kanda (甥君神田泰氏、東京天文台在職) の名前がみえはじめる。あたらしい時付というべきだろうか。